中村俊定文庫
文庫 18
132

中村文庫

宝玉文庫

脇

先脇ハ歩句ハ長ク時節時候多シ故ヤウニ
掃て第一ハ月のもとと上旬中旬下旬と
わけなる同し時節行とて雲霧なるの如ク
三月ハ霞なるの有さまなるこなの時節ハ
上旬の句ハ元日の旬ハ白馬の節書時節遠也
付歩数多ハ所要ニ成ル所ハ
也ハ句ハ本語也ハ歩句可

宝玉文庫
栗藤文庫

言葉〳〵ゝ句を〻〻ゝ（ゝ）衣数句ゝ〻ゝ句の
次第〻〻百字の節ハ大小の扱有〻〻詩ゝふ
起兼轉のこゝろ事（一の字）
脚字字脚をさゝめ〻後転向ゝ〻〻字
脚ゝ礎ゝ〻〻古式し移〻句意〻〻ゝふ時ハ
上下の海ゝ及ゝ
八九間をゝらす雨降　春ゝ
まゝのゝ〻ゝの圃　ゝる色

是ゝの場ゝ字脚ゝ〻ゝゝゝ（ゝ）
荆　椒　水　田　〻〻（ゝの秋ゝ
ゝ〻ゝる日ゝ〻ゝゝ
数句ゝ場ゝ云〻〻ゝ故ゝ時ゝ字脚ゝ〻ゝ
梅ゝゝの月ゝ日ゝ出ゝ山ゝ切ゝ
ところ〳〵ゝ雑子ゝゝ
数句ゝ場ゝ時ゝ出ゝ〻ゝ時ゝ
ゝ〻ゝゝし

市中ふまの泉や裏屋

暑しとて門の壱

芝まち原の脇にあそびとふ家とりの句ず窓軒

簾庭ちかくなりをりの川とりの句ず舟屋

なるほど舟とりの句ず海川とふるさめ

一ゆく古郡の法也

ことつ寄けどころより浦の雪

野ることを峠を入るの月

是とり合の稿に巡合とふ浦ず峠海ある山ちく

をくなることりの合さふふ乱ず巡

なるなりを

郭公まちあを心の形ち有

雨乃わたふすを戸の口

芝こころの附に二句の写とり味て孤磨

魅のくはくるはさ

額ちあるまを面の漏

芝人情の脚に人情の脚に字句まち入為〜
心持有之〜

馬方のもの〜歌をつゝり秋の雲
楷乃 楷の義つゝまて 況
況とあ況の況とい況字の礎す為古郎に
句の時節時代為るあ況をよ況るあれち
よ〜況為況て〜
況〜の況ままら況まあ中

うゝ社〜 時の変はさめる
是お對の脚すゝ歌字てすをその注意す為
てすを為ハ自論為る況のその鉄脚仲義行
為るこのすを為ゝ自分の人をせめる
青月や歌の使〜無しみて
句の義日の義に行
芝てすを為こあ文拾を〜〜多法に
数字のあ況ふすまを〜 考之る得

屋ら漏て寒ふかしひなか

寒きるあらふこの月の

芝猶言の腸し猶芝言の腸ハ遠ひ生をゆるを指

自の句ニ自の句ニ自の遠事也

客数自亭主腸時別ニ侍る為ひ指

新麦ハアもとすゆめ麦ハ

又お改屋の空をる形

芝陳分の句うしふらしる

出尋る家宿せるを破腸

はめ〳〵蓋る風の音

亭主数自客腸いまる遠事ニ辞象の法

をはる

市ゆ〳〵こせをやこみ田植ゑ

笠あるめん不破のさゝれ

同〳〵亭主自客腸ニみといふるみ國の屋時

時ゑる例ニ対屋の心ゑ又一指ニ不破

弧

美陽と生まるゝあるゝこと能はゝ
濃、腸五体の活こゝの芭蕉お對面原
遠路心身疲れとあれども数句十分の信拙者の
信者を七分の信し

まことの句

前句の詩を起兼轉合育俳諧又めて数句す
お對して腸育芭蕉陽天地を沈ス玄地から生ン
人より四季まるるあゝ

まことハ一轉の場あれ

附句と平句と違ひ微弱捌き出さらるる
句作習あり前句の文字字ることハ一句の振舞の
さるるあるもの前句なること又次の句
おとなるなあ叶理の知る時八の字なるの字
降ることなるなれ八寸三のさなること百韻の
中おるる選出ることまの海知られ常り
字なるとるる知ること

板取の一句

もら雀日和ゑる老ゑて

板屋ハ苔のそうとこ雨ハ板のあまを（紗中

ふらすもら）と立俳諧さ風）もらすゑの

老ゑて）と苔の心治るゆ〻る飛ゑて日和ゑると

ゆふる）是一句の姿ハ自ず治ゑ行ゑ井ゑる

趣

太山板の一ゑ

板の風雅治の詩の通ゑ

太山ハ春山ゑゆゑゆゑ）ゑるゆ〻ゑ板ゑゆゑ）雅

治の詩の通ゑて句ゑり浸ゑ板の風ゑ陽）

又雪風ゑゑ山ハ句意の〻ゑ言ハ雅無の

働め〻〻芝平自井ゑのゑゑ）ゑ

時ゑ〻〻

井ゑ

井ゑゑ苔の一ゑ

井ゑゑゑ第時ハ数の如ゑ味ゑ〻〻

板ゑゑ〻〻ゑ水のゑれ如

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同 [illegible]

[illegible]

時 [illegible]

意 [illegible]

[illegible]

[illegible]

夕霧をあはれとうち帰らん

岩上よりくだりしの名字なり 岸あとりて中と

中の字を句中とこそあるなれ 法師の

同 [illegible] 第一 [illegible]

山のくの字を絵にかきたる

句意有のまゝ言はまし 歩数の形とも

句中の怪意有けさりを考へ

吳竹 [illegible] 之の [illegible]

雲雀啼小田[illegible]持[illegible]

花藤こる岩の雲まを咲うつり

句上五文字仮名の事 [illegible] 五文字仮名の事

てをはるあるを形 仮名殿門柱 [illegible]

仮の古殿門の柱 [illegible]

自然と学之の道を行るみる上の第 初学の[illegible]

[illegible]

同 静字 [illegible]

去のを除て天下に名ある郭内
棟もまるく宮ゐを除一所
櫻 櫓山家の作を本の姿
世に歌字とめの事とて糸桐和歌机
なの歌歌字為の作受とす当流まるて
言を用ひ同一五音ずてすを移るあれ
水車帆舟船の歌なれは歌字とめ乃法す
時分なん右自化秘の口伝なり

て留まるを始めて留乃ものす
第の戸乃ほとを花の時なを
長方之大意極秘の口伝なり句意を心と
時の一

（松方者の力やうを帰一去の空　一句の法り赤方之の
上五字七み字の為の口受）

叩句目のこと
叩句の脇ハ一ゑの制をて低れを
懸ものとハ懸ものとハ言ハ仮名ハ仮名てすを為ものと

又みなとめまてふ所をその時は例の
五二三四の系統なる歌を一一口受

月花の一中

空坐寂寞として初春の花出る時は春を
とゝ告るゝ節は出るを待て春来る
五つ〻の裏の月雪〻〻可〻月雪〻〻
せいなるとの花の世界月雪〻〻は
好きなる百歌一ッ時〻初春の時の嫌の九寄

仙なるゝ初春又は短冊をとりて月
花の自三人以上の人は歩行の人はせめて月の
句も特別なる花大切なる故十三月の花の
空坐〻空坐〻の句毎に時〻合はるゝ故
物ゝ〻その坐の宗匠又は人老人なれば
出すゝ時は〻〻〻なる時〻〻〻〻〻〻
句あり〻〻〻の句出せば花時〻〻〻九月の次
来る嫌ゝ六七いとあ季九月より十三月より

所目ちかく空地の荒五百坪ばかりあるを
もて人をして六百坪あまりをきらせ一時あきいとも
うるはしき空地の荒地の事又八雖まもるべきに引
上荒とハ十三百めこれをしるべ前方ちかくなる
荒の百坪をもて一時の用に又ハ一百坪ハ荒の百坪を
外二百三百あてハ荒の百坪をもて田畑に
不用にて一ちの拵拵れなれハ空地の荒百坪をもて
なるべし

荒地拵をなすこと

一ちの畑を荒地あり荒地

渓拵をなすべきもの

前方拵の拵荒地腸の百坪拵の百坪拵荒地
さてハ外にてこれをもて荒地をなる
拵一連ハ拵荒地をなるべきもの非ずも
鼻祖のもとにかなハ雖方なるべき先ハ外
ものなり

ある植物ニ正花を付るなり
小家しん梅の字中
正花のよし也とうけて七五所
草花と書遣ひ前句ニある植物の時ハより花なき哉
ありしたる地名をあしらふ事也一葉の
機轉なる哉
式時歌仙七句めニ宵暮の句出す折ハ夏冬
三句のうちに月を定らするる法

宵やことあらたまる神の宮ふかし
ぬるより荻のそよぐ秋の風
八月を旅まくらなる小幡縁
宵暮といふは月ハ出ぬのちしたち越すハ時ハ付
又説ニハ八月の月の字まてにて一座の月を
あらひちハ宵暮といふは月の心持をなるる之
三句ニ合せて月の字御を知る也月花ハ
一巻の法にてまたあつかひ時ハ定て定法あるハ

こゝるあらひ身をきよめ　けの里に歩す

姥捨の月をハ誰と神ぬき

とゝ井ゝ月をもかるゝ宵ゝ

三笠山さゝの時の採菱ゝ

他事うつの一ツ

浦川集

浦ゝ年寄と名のつゝ宮ゝ

鈴鹿ゝ関ゝ明神ゝの里

ゝゝさゝゝ陽子の猪をつゝ

ゝゝハゝのまゝ七種ゝ川

月の宮おゝのゝゝ小鮒ゝ

愛地のゝゝ典薬の助

桐角ゝ（ウ）ゝんの子乃ゝ

桜の宮ゝ歌ゝ桜の子

めゝ月ゝ月のゝゝ雅一首ゝ　百歌一二ゝ

彩仙ゝゝゝゝゝ

ゝゝ九一ゝの月ゝ

附句のつゞき

一 寄合　前句を對と類聚とさゝるこゝろ

一 自他　前句を對と我古庭實のこゝろ

一 てまと　前句を對と吉とのこゝろ

蕉をとゝろ公集中の秋

乞合 乞意ハ 兄ハ自他を結てまと

めゝ形 寄合ハよゝ合のこゝろ類向の我吉をこ定

自他を

附合五姿のこゝろ

本のこゝろ　すゝ星こゝる新

宮まの油さゝ月 花のれて

きらるハ秋の月の山の陽すゝ重ゝめ

烏帽子よを重ゝ桜 一ゝら

山を後ゝ明さゝ月 ゝ重ゝ

船の道 流ゝ ゝ流ゝめ

おゝ前ゝ ゝれの ゝ月ゝ

君にわかれて閨思に

隣家にさゝめごとせざりけし

一人吟ずる窓の芭蕉

君の玉章二日隔る月を眺て

秋風の一葉に心をかゝぬなし

まつかぜを枕し宮を昔り

琵琶取て鹿は文に簾の隠

聞する女の人の恋を動かぬし

同門道のつり

我がみほどのうちはたかゝる方

御さまるれおもふかなり

とかしさハ猫をちきる力好

転

節句の人情を携ふ時の一将

其方の行ゆきを尋ねて枕とり

居にきさまる石京の記

随

入月にのぞむ旅ひらかる武者一人

前句の姿情をこそ詠ずべし

新しき春の雪〳〵一三之歩

放　　玲瓏たる触のさまもいとゝ

　　春のをり為る筏流す

前句に對する風色を愛情場の体と新し

　　隠棲をとゝめぬ袖を包む

逆　　うらの世を一つ見る猿

　　西王母東方朔月を見る

前句の姿情をこそ詠ずべ

時分七名八仲首七名ハ仲首ハ仲其その場

記兼　向附　拍子　発立　ホ　其人　時分　時節　時宜　天恵　剣恵　面新

也又兵雪捷という雪捷の方

星さへつとめて十八日

ひるまるまハ強る軍の太鼓

但七名八兼方
八仲八附方

是前日ハ只時程の姿なるゆ附日より夜詰さるゆ

一句を分ち尤名人の場

麦 烟の蕊地する條示抗

麦 [illegible]

芝を賞の外とする麦烟の地なる人と蕊地する法

なる其田畠を持つる古筆[illegible]知て麦拂ふ

表情

蕊をやりて麦の穂

との畠も東西の方を定めあり

麦の出来よろしからざるなれその材皆忘れて

日蔭なる所を刈て二月の頃芝自ひと刈て自ひ

しかし一度のみ刈る所百敵一自ひとまた

なるべし

皮肉骨の外

荷まこいるまかたの宿

皮

牛膝ハ[illegible]

又

肉

青

善賢の前まうある行徒
うたのうたのこころ
又
我ゆく脈をたるこころ
二度咲の四段ハを枝屋おろ
芙蓉山のこと
川音むかしこのあち
猪鹿ゆ山のうた音なるあ

心詞のうたを合うをを芙蓉山
あしとの空の詩をこうと
ちかるこまの流りの里の春
鈴ヶ峰をを筆をしりの
四方の山のこと芙蓉山
関ゆるる雪ゆ雪ゆ音ゆ
おろうし歌合うをひと
ひろ流ゆを中行年歌ゆ

白一百三法のこと

菩薩をあらわす九八牛軒

一分の無量借度おいて

、

発法する例まあり行目を羅

初備　松尾ふのもとの者る鴻

七一日八百法　色八八人目あり無量とさとりおよび

如来所說之言人乃至自分なり如来

自他の一切

無二のこと行のちうき行

他　ことを知る日をひとりとる法ちう

他の時　無量とする法の縁

三自の自を他とさとる句まで他のさとる意

きの時きと前句を動行その人をさとること

お鈔八自とすると二句の時八地の時と計多分自他

無二と知る八二自のとうと人法の後とを知れ

武八事情あるゝ時節あるを待て法門の附合乃
法境を分ち行

虚　實の一

禅門に行る所の童話

實　射るこゝろ地とゝめ沙門

虚　雖ども心亂ハ皆ゆゝ極

前句の御所ゆゝ御の化と實の附ハ心亂と
つゝ行ゝ勝ゝ句虚の附ゝ一轉の妙ゝ虚ゝ

實ゝ虚ゝ一つの實ハ虚ゝ虚ゝ行ゝ所ゝ
虚實ゝ俳諧の本ゝ墨ゝ附句の三略ハ是を
命ゝ名ハ一ゝ言ゝ法ゝ理邪の至ゝ所ゝ

戀句の一

大擔ゝ御ゝ心ゝ死出ゝ
所ハ地獄ゝ所ゝ
又
彩ゝ行ゝこゝろゝ持ゝ

黒髪をみだしたる物狂はし

意ハ人情ニして恋をしのぶ人の心ハ物かなし
とそ思ふもおもふて二句の首にいふて情
有やうに紙へし詞のうへに出しとく見る事あり
さるハ一句にて掲りしハ故ニ母なきをめぐりて出しても有
御より黒髪と表す是意の掛りに古人五首ほと
まれなる数句百韻に二首ありて有りける
百首なとハ三首ほとも出にけり表書の会合口受

匂ひの花乃つけ

糸桜腹一ぱいに咲にけり

ちるかと三月曙の空

花ハ桜ニかきりて又桜にあらぬ類の花ともなりての
賞語にして花婿など花嫁なとに用ふ桜の
盛りなる頃をいふ花ハ其中の場所ハ其中の陽之
匂花とさすなハ日輪也さる故に曙の空と輪を
持せ侍る之糸桜にて匂花とはなりぬ数ニ一句に対し

正花を持し是大秘し花ハ先と訓ス

あやめの　の

是一茎のもとにあるハ宮廷の歩行脇の

高き遠き所に活る又同じ枝葉の生なるハ

その高き所にハ花ハ濃し然るに先ハ

静宮様の御殿の軸の前ハ知るを以て拝ハ

隆り花を宮の　の

菲の栂　まきをなるもの

まきの居花の姉家とよみ侍り

菜園集まきの形ふるの姉の名ハ此本をなる

冷の音ぜんぜんと高く響くとも前方を要の詞と

ゑ形なるハ酌自所用ハ分ッ

有久奥文の　の

あるとき月を特ほめる

是有文に数て句把め新音立て

月を行のあるく特ほめる

是無文之一句ことゝもなる也

音色俳一句のこゝろ

小さゝらゝてゝ あられ降こ

小さゝらゝてゝ あられ降音

打物 陣中の姿まよう音の様意人情音

死句 活句のこゝろ

をさゝりまする蓮の一本

是活句也

小蓮をまする蓮の一本

是死句 蓮の中ゝ蓮のまもる風雪情

内外の句のこゝろ

あひまるのふるい市雪降こ

是内の句こ対外境を定て境を定て心の用

なるを内の句といふ

芭蕉翁こゝろ

是外の句こゝろ人の用行ふ眼前の深こ

之は二字を矢まれい所は所用する用の一向の人
自他の区別なく味ふべし

動作をさしていふ作者のこゝろ

意といふ時は所作をさしていふこゝろもカスムといふ用ス
ル動ス 滑史脚 かゝるはたらきを移して
所用といふ死活ともに黒白准て知べし

自覚 他覚 指覚のこゝろ

自覚 字ら之を知ずんば

他覚

自覚

行ずして知ることあるべし

住ずして月は淡路に入めり

八重の花ふる雪のこゝろ

四三 三四 所作をもつて心裏中

三四 九二 所作をもつて意味

三四 三四 意中に用ゆる所作

四三 二五 無心の觀の樹のこゝろ

腸自四自の乃至の心なり

みな落てそなるなり

右ひらがなを弾ずるなり

是この一字あるとき時にてはたにそなて

叶詞を入てとなへ一人めの三用のとき右ひらがな

をそ叶ずるなり右ひらがな秘この一ツ

とは字巳しるしたるものなり

あのうちとりつて帰らん

あのうちこのうちをトクとけて口受

聞をを用めそその字のなり

かゝ行をそ　人なとのあそ　め行のそ

そトやト延ちめそかゝひ行る

まこのあ中のはなはこまる

是はそう延るやしはそ親まるこ右乃秘

是ふこ福字の及ふまあるなり知るもまあ遠のてまと

人の字ハ一又字知る年心秘行ら

叶外ハ　をそ　とそ　てそ　是ふ　そよの三字

通ひ侍る　とそ　とう　とよ　和の歌

君心を　君心よ　君心の　又かなめて

言はれぬるを　女子有

こそとなりて　弱ふ川なる　みな

いて流つる　水の流れを

こそとなりの　の家をも　ふひさらをめ

侍る

月をこそ　なかめ　雨を　侍て

花を　こそ言て　侍て　侍も　又は

花をふる　おもてを　志る　品ひから

霞こそ　こそ　こあ　侍る　侍も　鹿山

又言ふ　こそ　有　歌

おもふ　秋　こそ　ふる　ありあり

思ふ　思ふ　ん　て　ものこそ

人の　人の

又

世の　行　こそ　滝は　白川は

花その　男　行　こそ　花を　滝は　滝の　つの　男

あつ　角　花　弟　秋の　口　侍　ふ　侍る　滝

呼　可　て　留りの　つ

を　水そこなる人のあひだに
は　うたてきたふ老世界のうん谷に
も　色て色ふかるひのあふ表に
も　ほのかおもてしらるるて
かも　志賀みるふかるまうに
あり　あるいは通ひて数日のあるまに
　　そなる松の色の月の光まで
下五文字の四上三字仮名ある如字と毛詩（あるこ）

夢のうちにあるひとたちまち
はう法空のうち也　まそと為る
前そうよの三字まそは　てとさるあるとて
をさ字のうち
　　そ寄そとちひ山ふるうちひ
　　とぐらある神きたる四拍て
　　さらふかて角人一色に数て
しのうとの空よりんうの生一

[illegible]

山さと小雪や木の葉の落て

[illegible]

けやみやまちの雪と木の葉ふと[illegible]

[illegible]入て[illegible]

あるに雪木の葉ふる[illegible]雪こゑ[illegible]日の入

[illegible]

[illegible]

八の山の[illegible]

東路や　[illegible]　あの日や　川[illegible]

山[illegible]や　[illegible]や　[illegible]の[illegible]て

[illegible]

博[illegible]

初[illegible]三つめ日あひの山　四つめ[illegible]山

[illegible]　[illegible]　八[illegible]中の山　九つめ[illegible]の山

[illegible]

いつのとしかは
あるふ以つきの山とまりて
たちふ以つてもの[illegible]
[illegible]ふ以つの都の[illegible]
以つい[illegible]
て[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]井の[illegible]
小さ[illegible]

[illegible]

[illegible]又地又[illegible]

[illegible]又時[illegible]鹿の色

[illegible]又[illegible]

[illegible]字[illegible]字[illegible]四字不[illegible]と
[illegible]

一字ちかひハ押字ありてちかふ也名をいへハちんちん
ちんちんの類也二字ちかひとハ節句のやうなるを
ちかひをとりの三字ちかひとハ三ヶ月ニ京不落ま
ちかひを付る類也猶口受

四字不同とハ

桜と花と音符句に風と波と付る也桜に風なと
いふを波しはれ藤に波その俳諧なと
いふ事は千句の仕立やうに伝有

八字付句の事

さへ　稀ゝ　桜　こそ　ハ　誰　を
右の文字節句にあらハよく／＼味ひて付
さ様の時ハ付遣まて付る也秘すへし

下の句にて留る事

つゆし　雅るもの　草木ハ志ほるゝ
おもひ付　月ハらはて

ラリルレロハヒフヘホの心にて留る也

同まとゑの一中
いそ帰行んかのこゝろ
雑帰まむ爲ことの
秋の花の　あるの百
あるふ神すゝ嘉神
巻巳〳〵　点巻同〳〵　その黒　又の字
二ツ　八の字　二ツ　ゝ　八巻
まるれるふの一中

十万里　さゝ〳〵　ゝ　社の
つゝふ所のふるゝ　利ゝ
所のある世八　ゝ
ひかり　さて　誰　いそ　ゝ　の　ふ　れ
らんすはゝ　ゝ　名字
いとゝ上の月の時八ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
はゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
時ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

月毛なる八荒を乗て搭て
彩色を施すなり此もの字八の字に受
なるべし　引る牛の淫を行て
孕ませる　大さ八分なり二つ付て
あるべし　ころつる玉の合ひ合ひて
一所のもち何まても抜り二重に形玉
又一つ程ずつ合ひて行く音又音ずつ
ひびき一の形

之ゆとりなるもの
おほとのりて強きもの
ウクスツヌフムユル　是を拝つて
東西南北の故に連ず八面八角のもちひる記
古式之俳ふるもの
拙者合和筆を授ける新式も古用搭の字を兼ね
ても出る八の八又八角表なる八を搭合みるなり
授れ一と是一巻を重の内八
我ものとなる義誠也

古今三島秘事

此三の秘事もとより伝授なるべき歌（連歌）

とゝのひたるもの句なりとも出ぬまゝ

停止（俳諧）ハ只名ばかりにて

とゝ准免なるべし（席毎にたのしみ）自分ハ

なるべきなりとも外ようのひとつ時の詠

句なれ一向あるべ外なるべ詠ようよく

百千なるはそもし味なるは唯稲負なるハ是と

彩推なりあるべ古来秘説なれ理却なる

ものなれ人志ハ我志ハ心あるとも枝

なれ目目なれ

百千なるの

百なるハ駄なる　まのあるまゝ音俗

行　古今歌

百ちとり啼るあ山ハ

あるまゝ　ゆ

此ものこころすなほ
なるものとして年の礼義を調ふ君臣父
子夫婦兄弟朋友まことの和を順
そなはり年中行事の業もまつりごとの三月
の初起そなはれば時の花の咲くまことの調ふ
まいとなるの時ひとしくひとつなる
ことあるべし人こゝまことなこゝ国をなるの巣
なる君子国といふ説あれども人をさとしてもて

いふべきなり

呼子鳥のこゑ

ものいふ　猿　地　ふ　人をいふ

呼子鳥　猿　地　人は来年の春
なる獣　奥　出　州　本　所　侯あて　季春
つる行　人　弟　物　長　陽　直
生　八　一　春　仁　性　往古は
天子降誕の時は極て祥瑞ありし

[illegible]
山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
親子兄弟朋友皆一洞のそのもの八朝ハこゝろ
山入[illegible]夕陽斜[illegible]
いそぐ尾越谷越[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
遠近のそのもの[illegible]
[illegible]
奥山[illegible]
[illegible]
稲屋[illegible]
下[illegible]

稲屋ヶ原農民ヶ[illegible]
[illegible]
[illegible]信用ヶ[illegible]古今要
我門ヶ稲屋ヶ原の峰ヶ[illegible]
[illegible]
山田ヶ[illegible]
稲屋ヶ原の[illegible]
[illegible]

出入ヶ門田の稲刈ヶ[illegible]
人[illegible]ヶ[illegible]
強奪ヶ又山田ヶ[illegible]
ヶ人[illegible]
滅ヶ民の[illegible]
みヶ[illegible]
[illegible]

海犬養（アマイヌカイ） 宿禰 岡麿の[illegible]日本記ヶ百姓の

みちとよむこ百姓ハ　帝の寶といふ　なこ三ツハ
諸ゝ なる行らハ我家善くなるの品なれハ俗授
ゝ なる　春夏秋冬のなるの中
いはゆる三ツあんかハ世間の社稷なる軍国
ともいふなるこハ人をなるとしいふなり人を生
ゝ なりこの毎年ゝ人の死さ　ゝ なる　詞の
あれ　一ハとなるの物ゝ　都てハ士農工商の
さゝ百ゝなるといふなるこ　その中ゝ　農人

山人をひろゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　先山人を新板本を
とゝ人を救ふなるを事とゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
新とゝ役事を勤め　御即位ふなるゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　新の祝ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　農民ハ
ゝ　新より　ゝ　ゝ　御貢ゝ　ゝ　五穀ゝ
ゝ　ゝ　善ゝ　天下ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

義我論曰

士農工商　叩のゝ　ゝ事ゝ　捨ハ　ゝ

先生ちん曰高ゝ指ん三の中歩すなを
指ゝいつもとら指ん白エゝ指ん二の中止すす
なるゝ指ゝいつもとら指ん曰とゝ言ふること
二ツハまなり足なを何をら指て何をらちん
まゝハ農民ハ

天子の御寶ゝ國の中とゝ止す指を
もをなるゝ

三ゝ指ゝ可ゝちんゝ天

茶ゝ酒の林もゝ百千ゝ
酒買ゝゝゝ時ゝん時ゝ
その笠ハ猫屋ゝの古家ゝ
石ハ高ゝ山風ゝ吹ゝ
をゝゝ

晋家秘傳抑坤殖

此書ハ季吟師より芭蕉翁に伝授
翁より予に伝授
古式の三巻
等も物語も當風代々乃掟
也他見ゆるまじき執心
[illegible]伝授
尋ね深秘也

元禄十丁巳天　晋其角